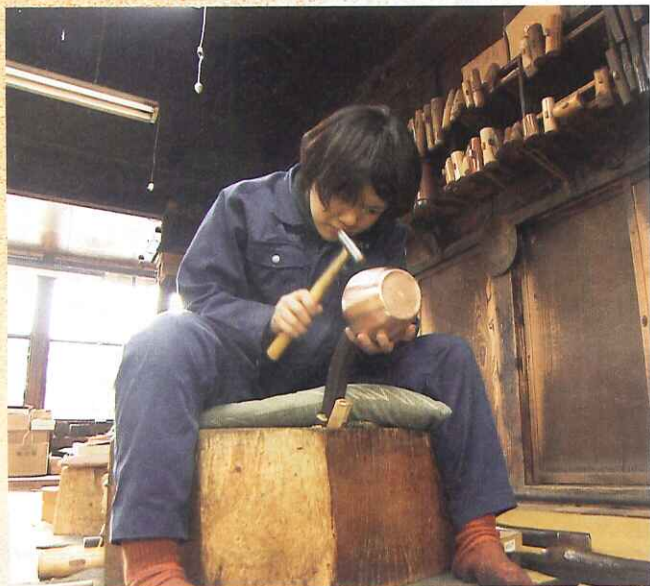


日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Akiko Hiyama

1990年新潟県生まれ。小学生の時に燕鋤起銅器づくりの元祖である「玉川堂」を訪れたことがきっかけでこの仕事に関心を抱き、専門学校卒業後に同社に入社。以来、伝統技術の習得に励む。



燕鋤起銅器(つばめついきどうき)

鋤を用いて一枚の銅板からつくる器で、江戸時代後期から燕市で製作されている新潟県の伝統的工芸品。殺菌作用や保温性に優れた銅器は実用品として重宝され、現在では美術的な価値も高く評価されている。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版
パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉



TV番組
ディスカバリーチャンネル(CS) 冠番組
「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00



ビジョン
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内

No.062 / 駿河竹千筋細工職人 大村 恵美 氏

つばめついき 燕鋤起銅器職人 樋山 朗子 氏

貪欲に鋤を振るい、故郷の誇りを繋ぐ。

樋山 朗子 氏

一枚の銅板を鋤で打ち起こしてつくられる器を、鋤起銅器という。新潟県燕市では江戸時代後期からその製作が始まり、茶器や酒器、鍋などがつくられてきた。

樋山朗子さんは、県の無形文化財に指定された技術を有する、創業約200年の老舗「玉川堂」で燕鋤起銅器づくりにいそしむ若き職人。故郷の伝統工芸である、この仕事との出会いは小学生の時だった。

きっかけは？

樋山「授業で今の職場を見学したのが最初です。幼いころから手で何かをつくるのが好きで、祖父が金物製造業を営んでいたこともあり、燕鋤起銅器づくりに親しみを感じました」

デザイン系の専門学校時代に芽生えた、「玉川堂」で仕事をするという

夢をかなえた樋山さん。まだ修業中なので茶筒やぐい呑みといった小物づくりしか許されていないが、仕事以外で独自の作品製作に積極的に挑み、日々努力を欠かさない。

燕鋤起銅器づくりは、銅板を炉で焼くことから始まる。そして、柔らかくなった板を「コンコン」と鋤でリズムカールに打ちながらイメージした形に近づけていく。その際、鋤を振るうリズムがとても大切だという。打つタイミングが均等でなければ、特徴である滑らかな曲線を描けないからだ。

十年、二十年、三十年と、使い込む程に趣を増す色合いも燕鋤起銅器ならでは。中でも「玉川堂」は多彩な着色を可能にしたことで世界的に知られるが、そのカギを握るのは錫が焼き付ける工程。微妙な温度加減が必要とされるのだが、うまくできたかどうかは最後まで分からない。着色液に浸して磨きをかけ、特殊な溶液で煮てよう

やく、仕上がりの色が現れるためだ。繊細な技と勘が求められる作業に、日々懸命に取り組む樋山さん。その腕は着実に上がっている。

目標は？

樋山「いつか看板商品である葉缶をつくりたいと思っています。そのためにも任された仕事に全力を尽くすだけでなく、独自の作品製作にもさらに貪欲に挑戦していきたいですね」

腕を上げることは、自分の可能性を広げるとともに、故郷の誇りを繋ぐこと。そう信じて前へと突き進む。明日への扉を開け、また二歩、夢に近づく。

※2014年3月取材、掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!
新たな挑戦に取り組む姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。